

局所的空主語言語としての初期英語とパラメーター階層

縄田裕幸*

Hiroyuki NAWATA

Early English as Local Null Subject Language and Its Implication for Parameter Hierarchy

ABSTRACT

There has been much debate in the literature about whether or to what extent Early English allowed null subjects. Recent statistical researches such as Rusten (2019) have revealed the overall picture of the distribution of null subjects in the language. In the theoretical comparative studies, on the other hand, the traditional null subject parameter (Chomsky (1981), Rizzi (1982, 1986)) has been reconsidered from the microparametric perspective since the pioneering work on partial null subject languages by Holmberg (2010). In this paper, I characterize Old and Early Middle English as “Local Null Subject Language,” which was the last stage of the gradual decline of referential null subjects that had once been productively observed in Proto-Germanic, and account for why pronominal subjects were likely to be dropped in V1 environments when they were interpreted to refer to third person referents in Early English, essentially revising and developing the seminal work by Nawata (2014). More specifically, I argue that referential null subjects were licensed by the speakers of Early English who had the option of default agreement for tensed verbs, and they were interpreted via the topic chain in the sense of Frascarelli (2007, 2018) and Frascarelli and Jiménez-Fernández (2019). I also evaluate the validity of our hypothesis from the viewpoint of the theory of parameter hierarchy put forth by Roberts (2019), and consider how we should deal with gradual syntactic changes that are often observed in diachronic development of many languages including English.

【キーワード：初期英語，空主語，パラメーター階層，素性継承，細分化された左方周辺部】

1. 序

一般に現代英語は典型的な非空主語言語，すなわち義務的に主語を必要とする言語として知られている。しかし今われわれが手にすることができる古英語・初期中英語（本稿では両者をまとめて「初期英語」とよぶ）の作品においては，ときに現代イタリア語などと同様に定形節で主語が顕在的に現れていないと思われる事例が観察される。ここから，古い時代の英語ではどの程度空主語が許されたのかという記述レベルの問題，そしてもし許されたとすればその認可のメカニズムはといったどのようなものであったのかという説明レベルの問題が浮かび上がる。

先行研究では，前者の記述的妥当性の問題についてでさえも，最近まで見解の一致をみていなかった。たとえば，Hulk and Kemenade (1993, 1995) は古英語では虚辞の空主語のみが許されたと述べている。他方で Gelderen (2000) によれば，古英語は現代イタリア語と同じように指示的な代名詞の脱落も許したが，空主語は通例三人称として解釈され，一・二人称として解釈されることはまれであったという。このような見解の相違は，

個々の先行研究が依拠する一次資料の違いに起因すると思われる。しかし近年の英語史研究で主流となっている電子コーパスの発達により，初期英語あるいはそれ以前のゲルマン系古語の空主語の生起状況に関する全体像が明らかになってきた (Walkden (2014), Walkden and Rusten (2017), Rusten (2019) など)。これらを総合すると，初期英語ではたしかに指示的な空主語が観察されるもののその頻度はゲルマン祖語などと比べるとはるかに低かったようである。

また共時的研究に目を向けると，2000年代以降の比較統語論研究では，空主語の認可に関する「古典的」空主語パラメーター (Perlmutter (1971), Chomsky (1981), Rizzi (1982, 1986)) では捉えられない事実の指摘や，それを説明する理論の提案が相次いでいる。ひとつの潮流として，マイクロパラメーター理論による空主語言語の分類の精緻化がある (Holmberg (2010), Roberts and Holmberg (2010), Roberts (2012, 2019) など)。そこでは，イタリア語に代表される「均質的空主語言語 (Consistent Null Subject Language)」，日本語などの「談話的空主語言語 (Discourse Null Subject Language)」に対し，フィンランド語などは「部分的空主語言語 (Partial Null Subject

* 高根大学学術研究院教育学系

(1) YCOEで空主語が生産的だったテキスト (Rusten (2019: 36-39))

テキスト名称	代名詞主語の数	空主語の数	空主語の割合
Bede	3923	111	2.8%
Anglo-Saxon Chronicle C	657	36	5.2%
Anglo-Saxon Chronicle D	763	52	6.4%
Anglo-Saxon Chronicle E	1098	34	3.0%
Vercelli Homilies (ScraggVerc 1)	204	6	2.9%
Vercelli Homilies (ScraggVerc 9)	76	4	5.0%
Vercelli Homilies (ScraggVerc 15)	77	2	2.5%
Vercelli Homilies, Homily IX	53	6	10.2%
Vercelli Homilies (ScraggVerc 19)	97	3	3.0%
Laws of Ine	122	8	6.2%
Bald's Leechbook (1)	191	27	12.4%
Bald's Leechbook (2)	252	42	14.3%
Bald's Leechbook (3)	83	2	2.4%
James the Greater	84	5	5.6%
Mary of Egypt	489	13	2.6%
Martyrology, I	63	4	6.0%
Lacnunga	103	4	3.7%

(2) YCOEにおける人称・数ごとの空主語の生起状況 (Rusten (2019: 99))

人称・数	代名詞主語の数	空主語の数	空主語の割合
一人称単数	8984	16	0.2%
一人称複数	6458	5	0.1%
二人称単数	6214	5	0.1%
二人称複数	2987	9	0.3%
三人称単数	36972	452	1.2%
三人称複数	13314	241	1.8%

Language)」として分類されている。また、空主語の認可に関して最近注目を集めているのが、空主語の解釈に節構造の左方周辺部が関与しているという仮説である (Frascarelli (2007, 2018), Frascarelli and Jiménez-Fernández (2019), Kato and Ordóñez (2019) など)。それによれば、空主語の解釈には談話レベルの「話題連鎖 (topic chain)」が重要な役割を果たしているという。

このような先行研究をふまえ、本稿では初期英語をゲルマン祖語で生産的だった指示的空主語が漸次的に消失した最終段階である「局所的空主語言語 (Local Null Subject Language)」として位置づけ、その空主語認可のメカニズムを明らかにするとともに、なぜ最終的に英語から空主語が消失したのかを説明することを試みる。さらに、Roberts (2012, 2019) などが提唱するパラメーター階層理論と本稿の分析を対比させながら、言語の通時的発達でしばしば観察される「緩やかな」統語変化を生成統語論が仮定するパラメーターの概念でどのように捉えるべきかを考察する。

2. 局所的空主語言語としての初期英語

まず初期英語における空主語の分布を概観しよう。古英語に関しては、Rusten (2019) が The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE) および The York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Poetry (YCOEP) の網羅的調査に基づく計量的な分析を行なっている。それによれば、古英語の代名詞主語と空主語の総数で空主語が占める割合は全体として高くなく、散文で1.0%、韻文で11.5%である。自然な言語使用に近いと考えられる散文に限れば、空主語は決して生産的とはいえない。ここから、Rusten (2019: 120) は “[N]ull subjects in OE constitute linguistic ‘residue’ as opposed to a productive grammatical phenomenon.” と述べ、古英語はすでに現代英語と同じ「非空主語言語」であったとしている。

しかし同時に、空主語の生起率はどのような環境でも均等に低かったのではなく、いくつかの非対称性が観察されるのも事実である。1つ目は、テキストによる非対称性である。散文作品での空主語の生起率は全体で1.0%であったが、中には比較的高頻度で空主語が現れたテキストも存在した。RustenによるYCOEの調査で空主

語が2例以上現れ、かつ生起率が2%以上だったテキストは(1)のとおりである。他方で、空主語の生起数が1例以下ないしは生起率が2%未満であるテキストは131ファイルにも上り、これらが全体の生起率を引き下げている。ここから、古英語の言語共同体には空主語を認める話者とそうでない話者が混在していたのではないかと推測される。

2つ目の非対称性は空主語の人称解釈に関するものである。YCOEにおける人称・数ごとの空主語の生起率をRusten (2019) がまとめたのが(2)である。一人称・二人称解釈の空主語の生起率がいずれも0.5%未満であるのに対し、三人称単数では1.2%、三人称複数では1.8%の生起率を示している。Gelderen (2000) が指摘したとおり、古英語では三人称解釈の空主語が一人称・二人称解釈の空主語よりも有意に高頻度で生じていたことがわかる。

3点目は統語環境の非対称性である。古英語の空主語は、(3)のように動詞が節の先頭に現れるV1環境(空主語が先頭要素であると考えればV2環境)において有意に高頻度で現れた。

- (3) *Ʒa he Ʒus gefaren hƷefde pro wende Ʒa when he thus gone had [he] turned then norƷweard to his scipum northward to his ships 'When he thus had gone, he then turned northward to his ships.'*
(ChronC 1013.25/Rusten (2019: 103))

Rusten (2019) は主節におけるV1環境と非V1環境、等位節におけるV1環境と非V1環境、そして従属節での空主語の生起状況を(4)のようにまとめている。ここからわかるとおり、空主語の生起率をもっとも高いのは等位節におけるV1環境で、51.2%という非常に高い頻度を示している(なお、Rusten (2019) はいわゆる等位主語削除(Coordinate Subject Deletion)による非頭在主語を含む例はあらかじめ排除している)。次いで多いのが主節のV1環境の7.2%で、これも散文全体の生起率1.0%を大きく上回る。それ以外の非V1環境および従属節では、生起率は1.5%未満に留まる。

また、中英語に関してはNawata (2014) がThe Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (PPCME2) を調査し、古英語と同様の「話者」「人称」「統語環境」に関する非対称性が観察されることを報告している。PPCME2で空主語が2例以上現れ、かつ生起率が2%以上だったテキストは(5)のとおりである。いずれのテキストでも、空主語は従属節よりも主節で高い頻度で現れている。従属節の空主語はほとんどの場合で主節と同じ動詞中位語順の環境で生じており、典型的な従属節語順である動詞末尾語順で空主語が現れているのはTrinity Homiliesの1例だけだった。また、人称の非対称性については多くのテキストで空主語の生起数そのものが少ないため断定はできないが、比較的多くの空主語が検出され、かつラテン語からの影響のないAncrene Riwleにおいては、三人称代名詞に占める空主語の生起率が一人称・二人称よりも有意に高かったと報告されている(ibid.: 106)。ただし、(5)で示したテキス

(4) YCOEにおける統語環境ごとの空主語の生起状況 (Rusten (2019: 103))

統語環境		代名詞主語の数	空主語の数	空主語の割合
主節	V1語順	1108	86	7.2%
	非V1語順	20207	64	0.3%
等位節	V1語順	144	151	51.2%
	非V1語順	13197	177	1.3%
従属節		38477	250	0.6%

(5) PPCME2で空主語が生産的だったテキスト (Nawata (2014: 105))

	主節			従属節		
	pro	代名詞	pro生起率	pro	代名詞	pro生起率
Ancrene Riwle	41	764	5.1%	27	1463	1.8%
Hali Meidhad	12	87	12.1%	4	224	1.8%
St. Juliana	10	43	18.9%	1	92	1.1%
St. Katherine	10	47	17.5%	1	107	0.9%
Lambeth Homilies	4	78	4.9%	1	123	0.8%
St. Margaret	10	50	16.7%	0	71	0%
Peterborough Chronicle	5	134	3.6%	1	118	0.8%
Trinity Homilies	36	396	8.3%	26	772	3.3%
Kentish Sermons	5	54	8.5%	3	84	3.5%
計	133	1653	7.5%	64	3054	2.1%

トはいずれも初期中英語からのものであり、後期中英語のテキストで生起率2%を越えるものはなかった。ここから、Nawata (2014) は英語の空主語は後期中英語に消失したと結論づけている。

古英語など西ゲルマン諸語の起源であるゲルマン祖語 (Proto-Germanic) は、現代イタリア語などと同じ「均質的空主語言語」であったといわれている (Walkden (2014))。それに比べると古英語は空主語の生起頻度が非常に低いことから、Rusten (2019) は古英語を「非空主語言語」に分類している。しかし、上述のように古英語や初期中英語で、一部の話者が限られた条件のもとで空主語を認可したのもまた事実である。そこで、本稿では後の理論的分析のために(6)のような記述的理想化を行なう。

- (6) 初期英語 (=古英語および初期中英語) では、V1 環境において三人称解釈の空主語を随意的に許す話者が存在した。

このような特徴を持つ言語を「局所的空主語言語 (Local Null Subject Language)」とよぼう。ゲルマン祖語は均質的空主語言語であったが、通時的発達の過程で空主語の生起環境が徐々に狭まり、局所的空主語言語に変化したのではないかと推測される。最終的に(6)の特徴は後期中英語に失われて、英語は非空主語言語になった。

なお、局所的空主語言語はフィンランド語などの「部分的空主語言語」とは異なる点に注意が必要である。両者は空主語と顕在的代名詞が自由交替を示すなど共通点もあるが、初期英語では空主語が主節と等位節のV1 環境でのみ生じていたのに対し、部分的空主語言語では(7a)のように従属節でも自由に空主語が生じることができる。また、初期英語の空主語はほぼ三人称解釈に限られるが、部分的空主語言語で空主語文が単独で提示されると、(7b)のように一人称または二人称解釈しか許されない。

(7) a. Finnish

Pekka väittää [että *pro*
 Pekka claim.3.SG.PRES. that [he]
 puhuu englantia hyvin].
 speak.3.SG.PRES. English well
 'Pekka claims that he speaks English well.'

b. Finnish

Puhun / Puhut / *Puhuu
 speak.1.SG.PRES. speak.2.SG.PRES. speak.3.SG.PRES.
 englantia.
 English
 'I/You/He/She speak(s) English.'
 (Holmberg (2005: 539))

さまざまな空主語言語の類型的違いをマイクロパラメーターでどのように捉えるかという問題については、5節で立ち戻って考察する。次節では、(6)の記述的理想化および後期中英語における空主語の消失を説明するための理論的枠組みを導入する。

3. 初期英語の統語論

この節では、分析の枠組みとしてNawata (2009), 縄田 (2019) (以下N) による初期英語の統語派生の概要を紹介する。まずNはRizzi (1997) の細分化したCP構造を採用し、初期英語の節構造を(8)のように仮定している。

(8) 初期英語の節構造

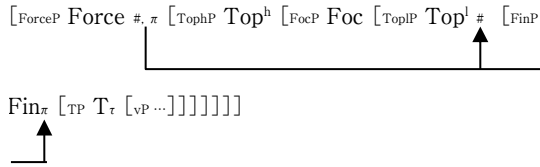
[_{ForceP} Force [_{Top^hP} Top^h [_{FocP} Foc [_{TopIP} Top^l [_{FinP} Fin [_{TP} T [_{VP} ...]]]]]]]]]

Chomsky (2008) の素性継承理論では動詞屈折に関わる値未指定素性がCPフェイズ主要部に基底生成されて非フェイズ主要部へと継承される。Nは(8)の構造においてForceがフェイズ主要部となり、Top, Foc, Fin, Tが非フェイズ主要部となると仮定している。そうすると、どの素性がどの非フェイズ主要部に継承されるかについてパラメーター可変域が生じることになる。古英語の動詞変化表(9)が示す通り、初期英語は複数形を示す独立した形態素((9)では/-ap/, /-on/)が存在した。ここから、Nは初期英語では人称と数が独立した機能範疇によって担われていたと想定し、Forceに基底生成された値未指定の数素性(以下#)がTop^lに、値未指定の人称素性(以下π)がFinに、それぞれ継承されると提案している。また、時制素性(以下τ)は素性継承によらずTに基底生成されると仮定している。したがって、初期英語における動詞屈折に関わる素性の分布は(10)のようになる。

(9) 古英語の弱変化動詞dēman 'judge' の変化表

	現在		過去	
	単数	複数	単数	複数
一人称	dēm-e	dēm-ap	dēm-d-e	dēm-d-on
二人称	dēm-(e) st	dēm-ap	dēm-d-est	dēm-d-on
三人称	dēm-(e) þ	dēm-ap	dēm-d-e	dēm-d-on

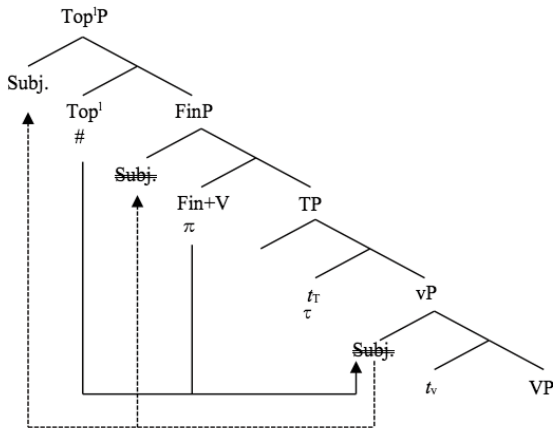
(10) 初期英語における素性継承



したがって、#、π、τが一律にTにある現代英語と異なり、初期英語ではこれらの素性がすべて異なる機能範疇に分散していたことになる。

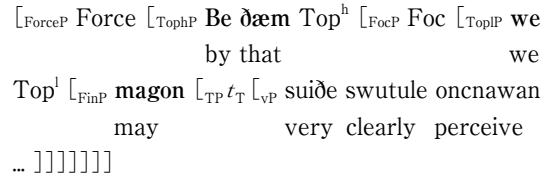
この素性分布に基づいて、主節と従属節の基本語順が派生される。談話階層型言語である初期英語では、主節において話題要素が先頭に現れ定形動詞が後続するV2特性を示していたが、代名詞主語は常に定形動詞に先行していた。Nは、この語順は代名詞主語が人称・数の一致に付随してEPP移動をすることで生じたと主張している。その派生を見ていくと、まず(11)に示すように、探査子#とπは同時に主語と一致関係(Agree)を結ぶ。これが複数の探査子(probe)と単一の標的(goal)との関係になっている点に注意されたい。Hiraiwa(2005)は単一の探査子が複数の要素を標的として同定する「多重一致(Multiple Agree)」とよばれる統語操作を提案しているが、(11)は複数の探査子と単一の標的を含む「逆多重一致(Inverse Multiple Agree)」とでもよべる関係である。

(11) 一致に付随した代名詞主語移動(実線は一致関係、点線は移動を示す)



それに付随して、代名詞主語はFinP指定部とTopP指定部に同時に移動する。その結果、主語のコピーは元位置のvP指定部を含めて3つできるが、発音の際には連鎖の先頭にあるコピー以外は削除されるので(cf. Nunes(2004)), FinP指定部とvP指定部のコピーは削除され、TopP指定部のコピーのみが発音される。また、定形動詞は話題先頭構文で連続循環的に主要部移動を繰り返してFinまで上昇するとされており、上の主語移動とあわせて、(12)のような「話題—代名詞主語—定形動詞」の語順が派生される。

(12) 話題—代名詞主語—動詞語順

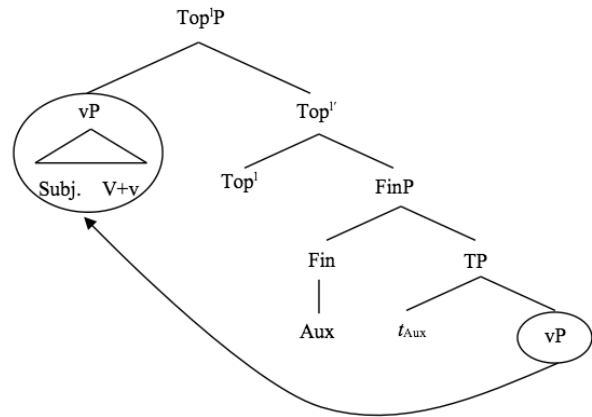


'By that, we may perceive very clearly ...'
(CP 26.181.16)

他方で、話題として解釈されない名詞句が主語となっている場合には、主語は時制素性τによる格付与に付随してTP指定部に移動し(cf. Pesetsky and Torrego(2001, 2004)), 「話題要素—定形動詞—主語名詞句」という典型的なV2語順が派生された。このように、初期英語では主語の情報構造ステータスに応じて2つの主語位置が使い分けられていた。このうち次節で論じる空主語構文の派生と直接的に関係するのは、(11)の代名詞主語の派生である。

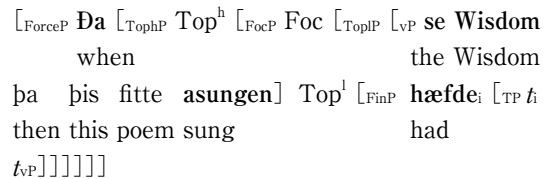
主節と異なり、従属節では一般に話題や焦点といった情報構造上の要因が語順に反映されにくい。換言すると、話題化や焦点化による倒置は基本的に「主節現象(root phenomenon)」なのである。このことを捉えるため、Nは初期英語の従属節では(13)のように主語を含むvPがTopP指定部に移動したと主張している。

(13) 従属節のvP前置構造



この移動によってTopPの機能が抑制され、話題要素が同じ位置に移動してV2語順が派生されるのを防いでいる。定形(助)動詞はTからFinまで移動しており、結果として次のような動詞末尾語順が派生される。

(14) 接続詞—主語—語彙動詞—助動詞語順



'when Wisdom had sung this poem' (Bo 30.68.6)

(15) 後期中英語の規則動詞demen 'judge' の変化表

	現在		過去	
	単数	複数	単数	複数
一人称	dem-e	dem-e	dem-d-e	dem-d-e
二人称	dem-(e) st	dem-e	dem-d-e	dem-d-e
三人称	dem-(e) th	dem-e	dem-d-e	dem-d-e

まとめると、初期英語における主節語順(12)と従属節語順(14)の非対称性は、前者では代名詞主語がTop¹P指定部に移動しているのに対し、後者では同じ位置にvPが移動していることから生じている。

主節のV2語順は後期中英語に消失した。Nによれば、これは動詞屈折接辞の衰退によってもたらされたものである。(15)に示すように、この時期に複数形を示す独立した形態素が失われた。この形態的变化により、#が π と異なる機能範疇によって担われる証拠が失われた。その結果、15世紀半ば以降はForceに基底生成された#と π がともにFinに継承されるようになった(以下、両者を束ねた一致素性を ϕ と表記する)。このパラメーター変化により、Top¹Pは節構造の左方周辺部から消失し、さらに定形動詞はTまでしか上昇しなくなった。

(16) 後期中英語の節構造

[_{ForceP} Force_ϕ [_{Top^hP} Top^h [_{FocP} Foc [_{FinP} (Subj.) Fin_ϕ [_{TP} (Subj.) T_τ+V [_{vP}...]]]]]]]]]

この構造のもとで、主語は ϕ との一致関係に付随してFinP指定部にEPP移動するか、 τ からの格付与に付随してTP指定部に移動するかのいずれかである。後期中英語でも2つの主語位置が利用できたことは、TPに付加している時の副詞に主語が先行または後続できたことから明らかである。

(17) a. 主語—副詞—定形動詞語順

[_{ForceP} wher-fore [_{Top^hP} Top^h [_{FocP} Foc [_{Top¹P} Top¹ wherefore
[_{FinP} þat water Fin [_{TP} afterward [_{TP} was
that water afterward was
[_{vP} clepede euermore Walbroke]]]]]]]]]]]
called evermore Walbroke
(M3: CMBRUT 3, 39. 1193)

b. 副詞—主語—定形動詞語順

[_{ForceP} that [_{Top^hP} Top^h [_{FocP} Foc [_{Top¹P} Top¹ [_{FinP} Fin
that
[_{TP} evermo [_{TP} thys cercle equinoxiall
evemore this celestial equator
turnith [_{vP} justly from verrey est to verrey
turns justly from very east to very
west]]]]]]]]]]
west (M3: CMASTRO, 666. C2. 111)

まとめると、#がTop¹主要部からFin主要部に通時的に推移したことでV2語順が消失するとともに、上位の主語位置もTop¹P指定部からFinP指定部に下方推移した。以下の議論に関連して重要なのは、この一連の変化が生じた時期が、空主語が消失した時期とほぼ一致するということである。

4. 初期英語の空主語構文の派生と衰退

以上の枠組みをふまえて、英語史における空主語の認可とパラメーター変化について分析を行なう。関連する記述的理想化を(18)として再掲する。

(18) 初期英語(=古英語および後期中英語)では、V1環境において三人称解釈の空主語を随意的に許す話者が存在した。

関連する問いは次のように細分化される。(i)なぜ初期英語で空主語を許す話者と許さない話者がいたのか。(ii)なぜ空主語は三人称で解釈されたのか。(iii)なぜ空主語はV1環境でのみ認可されたのか。(iv)なぜ空主語は後期中英語で消失したのか。これらの問いに対して、以下ではNawata (2014)の分析を修正・発展させながら答えていきたい。

4.1 空主語の認可条件

はじめに空主語の認可に関わるいくつかの仮説を導入する。まず感覚運動(Sensorimotor: SM)インターフェイスと概念・意図(Conceptual-Intentional: C-I)インターフェイスにおいて、名詞類には次の条件が課せられると提案する。

(19) a. SMインターフェイス条件

DPが音声的に具現化されるためには、語彙挿入(vocabulary insertion)に十分な素性を備えていなければならない。

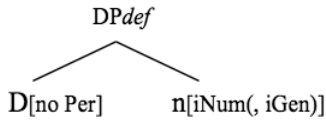
b. C-Iインターフェイス条件

指示能力を持たないDPが適切に解釈されるためには、他の要素から指示対象を復元しなければならない。

SMインターフェイス条件(19a)が意図しているのは、音韻部門で代名詞に適切に語彙挿入が行なわれるためには、関連する性・数・人称の素性が十分に備わっていなければならないということである。そこで、便宜上代名詞

が語根 (root) を含まない名詞化子nとDの複合体であると想定し, 空代名詞の内部構造を(20)のように仮定する。

(20) 空代名詞の内部構造



この構造では名詞化子nに数と(随意的に)性が指定されているが, Dには通常指定されている人称素性が欠けている。この人称素性を欠いた代名詞DPをDPdefと表記する。内部構造の詳細は以下の議論に直接影響しない。重要なのは, DPdefが人称素性を指定されずに統語計算に導入されるという点である。

また, 十分な素性を備えていないDPdefはそれ自身で指示能力をもたないので, 他の要素から指示対象を復元して(19b)のC-Iインターフェイス条件を満たさなければならない。しかし初期英語の動詞屈折は過去形で一人称と三人称が区別されないことから(3節(9)参照), DPdefの解釈を動詞の形態情報から復元することはできない。そこで, Frascarelli (2007, 2018), Frascarelli and Jiménez-Fernández (2019) を援用して, 初期英語のDPdefは「話題連鎖」によって解釈されたと提案する。節構造の左方周辺部にはFocPを挟んで2つの話題句, すなわちTop^hPとTop^lPがあるが, これらの談話上の機能はおおよそ次のようなものである。

(21) a. High Topic (Top^h)

- 談話レベルのアバウトネス (aboutness) 機能
- 対比機能
- 場面設定機能

b. Low Topic (Top^l)

- 文レベルのアバウトネス機能
- 旧情報表示機能

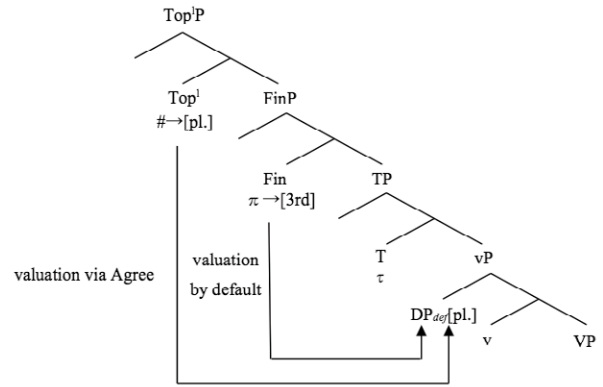
(cf. Frascarelli (2007, 2018), Frascarelli and Jiménez-Fernández (2019))

Top^hPは談話レベルのアバウトネス機能を持ち, その指定部を占める要素が節境界を越えた話題連鎖を形成する。新しい話題が談話に導入される場合は義務的に発音されるが, 既出の話題を引き継ぐ場合は音声的に空でもよい。

4.2. 初期英語における空主語の認可

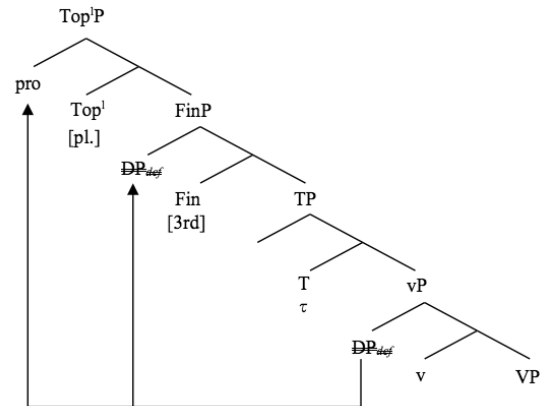
さて, いよいよ空主語を含む文の派生と解釈を具体的に検討しよう。DPdefが主語として含まれる節の一致関係は(22)のようになる。

(22) 初期英語空主語構文の派生 (1/3) : 一致素性への値付与



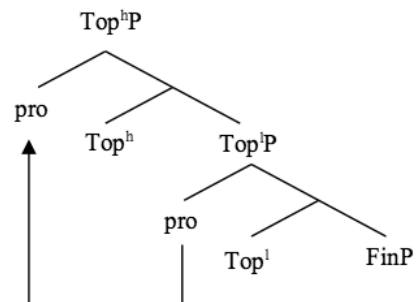
Top^lの探索子#は, DPdefとの一致操作 (Agree) により数の値が与えられる。他方, Finの探索子πはDPdefとの一致操作が成立しないために, 最終手段 (last resort) としてデフォルト (default) により三人称の値が付与される。そしてこの数・人称の値付与に付随して, DPdefが(23)のようにFinP指定部とTop^lP指定部に移動する。

(23) 初期英語空主語構文の派生 (2/3) : 主語移動



DPdefは形態的具現化に必要な人称素性を欠いているため, Top^lP指定部で音声的にproとして具現化する (cf. (19a))。しかし, この位置ではDPdefはC-Iインターフェイスで認可されない。なぜなら, 指示対象を復元するための十分な解釈可能素性をもたないからである。そこで, DPdefは解釈を求めてTop^hP指定部にさらに移動する。

(24) 初期英語空主語構文の派生 (3/3) : 話題移動



この位置で, DP_{def}は節境界を越えた話題連鎖を形成する。2節(3)で示した初期英語の典型的な空主語構文の構造は(25)のように表される。

- (25) [ForceP [ForceP **Pa** [Top^hP <he>_i Top^h [Top^hP [vP **he** **ðus**
when he thus
gefare]] Top [FinP **hæfde** [TP T **t_vP**]]]]] Force [Top^hP
gone had
<pro>_i Top^h [Top^hP **pro**_i Top^h [FinP **wende** [TP **þa**
[he] turned then
norðward to his scipum]]]]]
northward to his ships

このように, 各節のTop^hP指定部要素による談話レベルの話題連鎖 <he>_i, <pro>_iが形成されることでDP_{def}は解釈を得る。(25)では<he>が<pro>をc統御していないが, 談話レベルの話題連鎖は文の境界を越えて形成されるので, 移動の連鎖と異なりc統御条件は課されないと考えるのが自然であろう。また(4)からわかるように, 同じV1環境でも空主語は主節よりも等位節で圧倒的に高い頻度で観察された。これは, 等位節では何らかの理由で話題連鎖が形成されやすいためではないかと思われる。談話トピックの連鎖にどのような構造的制約が関与しているかは, 今後の研究課題である。

以上のような空主語構文の派生メカニズムをふまえて, 4節冒頭で挙げた (i)-(iv) の問いに答える。まず (i) の話者に関する非対称性であるが, 初期英語と典型的に近いと考えられているアイスランド語では, (26)のような虚辞構文において動詞が主格名詞句と一致する方言とデフォルトの三人称単数の屈折を示す方言があることが知られている (Sigurðsson and Holmberg (2008))。

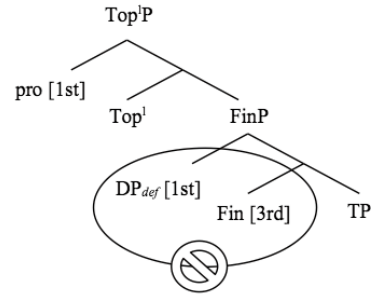
- (26) a. Icelandic A
Það líkuðu einum málfræðingi þessar
EXPL liked.3.PL one linguist.DAT these
hugmyndir.
ideas.NOM
- b. Icelandic B/C
Það líkaði einum málfræðingi þessar
EXPL liked.3.SG one linguist.DAT these
hugmyndir.
ideas.NOM

初期英語の話者の中にも, (22)の一致関係においてデフォルト一致を許す話者と許さない話者がいたと想定するのはそれほど不自然なことではないだろう。前者のみが主語としてDP_{def}を容認し, 空主語構文を派生させることができたと考えられる。ただし, アイスランド語と異なり初期英語では標的がDP_{def}の場合に最終手段としてデフォルト一致が適用されたと仮定する。

次に (ii) の人称制限であるが, (25)のような話題連鎖

それ自体は, 一人称あるいは二人称の談話トピックとも作ることができる。しかし, 連鎖にDP_{def}が含まれる場合は別の問題が生じる。話題連鎖によって得られたDP_{def}の解釈が節内部での移動の連鎖でも共有されるとすると, (27)のようにFinP内部で人称の値の不一致が生じる。

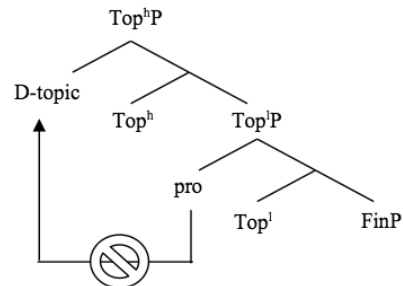
(27) 空主語解釈の人称制限



直感的にいうと, 動詞屈折がたとえデフォルトの結果であっても三人称を指定されると, 主語のDP_{def}もまた三人称の解釈を強制されるということである。

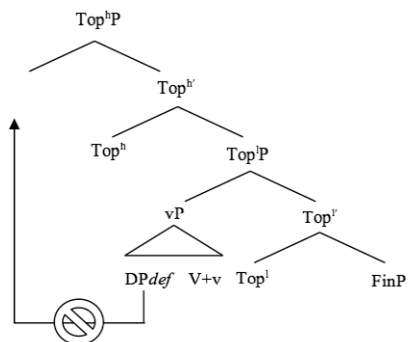
続いて (iii) の統語環境の制限を考える。主節の非V1環境, すなわちTop^hP指定部に別の談話トピック (Discourse)-topic)がある場合, DP_{def}は同じ位置に移動できないために話題連鎖によって指示対象を復元できず, C-Iインターフェイスで認可されない。

(28) 主節非V1環境での空主語生起不可



また, 従属節の動詞末尾語順はvPがTop^hP指定部に移動することで派生されるが, 指定部に移動した要素は一般に島を構成することから, DP_{def}を取り出すことはできない。

(29) 従属節動詞末尾語順での空主語生起不可



したがってDP_{def}はTop^hP指定部にさらに移動して話題連鎖によって解釈を復元することができず、C-Iインターフェイスで認可されない。

以上の分析から、(18)の理想化でカバーされる典型的な空主語構文の派生を説明することができた。ただし2節で概観したRusten (2019)のデータが示しているように、初期英語の空主語はV1環境と三人称解釈に完全に限定されていたわけではなかった。上記の分析は、そのような例外的事例の一部に対しても説明を与えることができる。たとえば、(30a)はYCOEから採取した例であるが、その構造は(30b)のように示される(疑問文で定形動詞はFocまで移動する)。

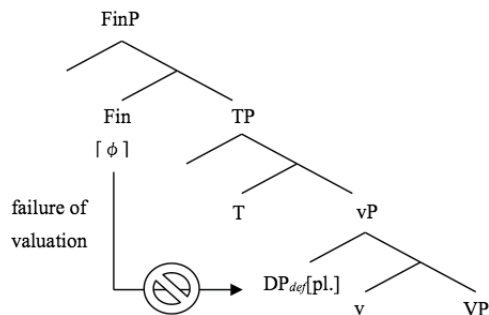
- (30) a. & him to cwæþ, Broþor, hwyder wille
and him to said Brother, whither will
pro feran mid þys medmyclum scipe?
[you]go with this mediocre ship
'and said to him, "Brother, whither will you go
with this mediocre ship?"
(coblick,LS_1.2_[AndrewMor [BIHom_19]] :
233.66.2969)
- b. Broþor_i, [_{ForceP} Force_[Q] [_{Top^hP} pro_i Top^h [_{FocP} hwyder Foc+wille [_{Top^hP} pro_i t_{Top^h} [_{FinP} DP_{def} t_{Fin} [_{TP} t_T [_{vP} DP_{def} feran mid þys medmyclum scipe]]]]]]]]]]

この例では、呼びかけ語に続く主節疑問文で空主語が現れている。この文は法助動詞willeの前に疑問詞hwyderが現れる非V1環境であり、空主語は二人称として解釈される。(30b)に示すように、細分化された左方周辺部において主節の疑問詞はFocP指定部に生じる (Rizzi (1997))。したがって、DP_{def}はTop^hP指定部から疑問詞を越えてTop^hP指定部に移動し、話題連鎖を形成することができる。また、ここでは呼格Broþorに影響されて動詞の形態が二人称単数現在のwiltではなく三人称単数現在のwilleとなっている。このように、主語の先行詞が動詞のデフォルト一致と矛盾しない場合には、空主語の一・二人称解釈が許されたと考えられる。

4.3. 後期中英語における空主語の消失

最後に、なぜ後期中英語で空主語が消失したのかという (iv) の問いを考えよう。3節で論じたように、15世紀半ば以降は動詞屈折形態の衰退にともない#がπと別個の機能範疇に担われる証拠が失われ、Forceに基底生成された#とπがともにFinに継承されるようになった。

(31) 後期中英語における一致素性への値付与



結果として、#とπを含む一致素性φは単独の探査子として主語と一致関係を結ぶようになった。ここで、探査子の値付けに関する制約として(32)を仮定するのは理にかなっていると思われる。

(32) 値付けに関する制約

ある探査子pは、一致操作 (Agree) またはデフォルトによって値未付与素性の値を得ることができるが、両者を併用することはできない。

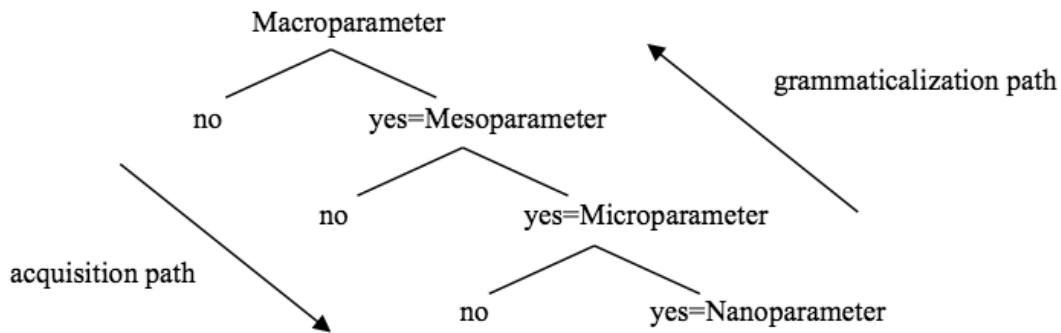
これにしたがえば、#とπが独立した探査子としてはたらく初期英語の構造(22)と異なり、両者が単一の探査子となっている後期中英語の構造(31)では、#が一致操作で、πがデフォルトで値を得ることはできない。したがって、DP_{def}が主語として現れると統語派生の破綻が不可避となった。

5. 初期英語の空主語とパラメーター階層

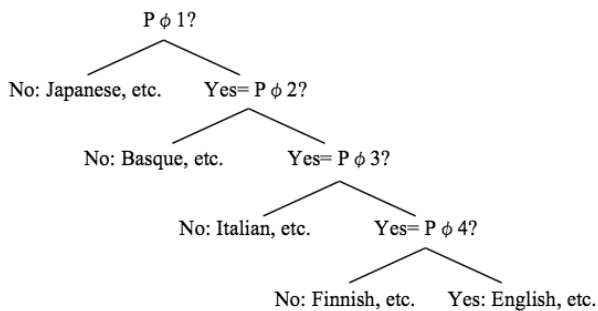
この節では、前節の分析に基づいて英語史における空主語の消失過程を捉える理論モデル考察したい。Roberts (2012, 2019 inter alia) は、古典的なマクロパラメーターと近年研究が進んでいるミクロパラメーターやナノパラメーターを包摂する概念として、(33)のような「パラメーター階層(parameter hierarchy)」を提唱している。各パラメーターの種類は統語現象に対する影響の大きさを表したものである。たとえば、語順に関するパラメーターはマクロパラメーター、個別の語彙項目の用法はナノパラメーターに分類される。ただし、これらの区分はあくまで相対的なものであり、それぞれの特性が固有に定義づけられているわけではない。言語習得の際、子供は上位のマクロパラメーターからメゾパラメーター、ミクロパラメーター、ナノパラメーターへと順に設定していく。逆に言語変化の過程では、最初はナノパラメーターレベルで変化が始まり、それが蓄積されることでより大域的なパラメーター変化につながっていく。

このようなパラメーター階層の考え方は、さまざまな統語現象に適用することができる。(34)はRoberts (2019)が空主語言語の分類として提案しているパラメーター階層である。

(33) パラメーター階層 (Roberts (2012, 2019 inter alia))



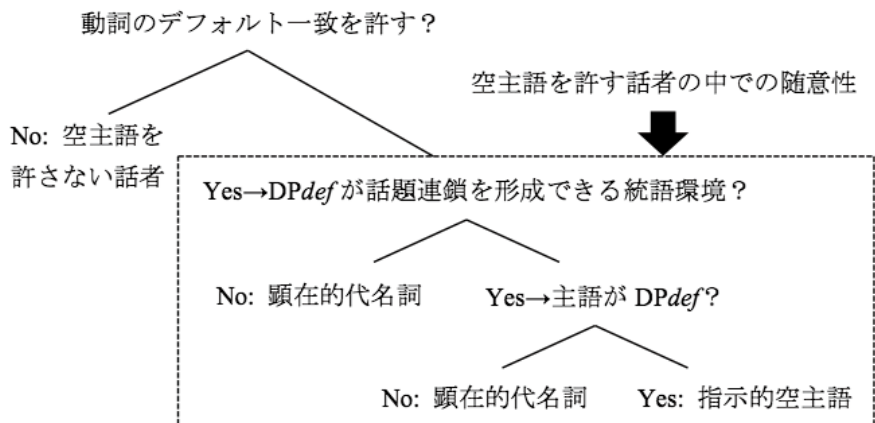
(34) 空主語言語のパラメーター階層 (Roberts (2019))



枝分かれの分岐点にある $P\phi_x$ は代名詞類の素性に関するパラメーター設定を表しているが、詳細はここでの議論には直接関わらないので置いておく。マクロパラメーターの $P\phi_1$ が No に設定されると日本語タイプの談話的空主語言語が獲得される。また $P\phi_1$ が Yes で $P\phi_2$ が No の場合には、主語に加えて目的語も空項として現れるバスク語タイプの言語が得られる。さらに $P\phi_2$ までが Yes で $P\phi_3$ が No であればイタリア語タイプの均質的空主語言語、 $P\phi_3$ まで Yes で $P\phi_4$ が No だとフィンランド語タイプの部分的空主語言語となる。最後に、英語タイプの非空主語言語は、すべてのパラメーターで Yes が選択された場合に獲得される。

Roberts のパラメーター階層の考え方は非常に大きな提案であり、その妥当性について論じることは本稿の目的を越える。しかし、空主語言語の分類に話を限定すれば、(34) のパラメーター階層にはいくつかの問題があるように思われる。第1に、局所的な空主語言語としての初期英語をこの階層のどこに位置づけるかが課題となる。ただしこの点に関しては、(34) の階層をさらに精緻化することで技術的に解決できるだろう。より重大な第2の問題点は、この階層が言語変化の方向性を正しく予測できないことである。上で述べたように、パラメーター階層仮説では言語変化はナノパラメーターレベルで始まり、メゾパラメーターやマクロパラメーターの大きな変化につながっていくと仮定されている。もしそれが正しければ、一般に英語のような非空主語言語は部分的空主語言語から均質的空主語言語へと、空主語の分布を拡大させる方向で変化すると予想される。しかし、英語の歴史を見るかぎり事実はその逆である。すなわち、ゲルマン祖語は均質的空主語言語であったが古英語の段階で空主語の分布がかなり制限された局所的な空主語言語となり、最終的に非空主語言語に変化した。このような空主語が徐々に失われる方向での変化は英語史に固有のものではなく、古フランス語から現代フランス語への変化やヨーロッパポルトガル語からブラジルポルトガル語への変化などでも見られる一般性の高い現象である。

(35) 局所的な空主語が生じる要因の階層関係



(Frascarelli and Jiménez-Fernández (2019))。

初期英語で空主語が認可される諸要因を4節での分析に基づいて整理すると、(35)のような階層関係が得られる。最初の分岐点は動詞のデフォルト一致を許すかどうかであり、それによって空主語を許さない話者と許す話者が区別される。四角の囲みの中は空主語を許す話者がもつ文法を表したものであり、まず空主語はそれ自身が話題連鎖を形成できる環境(=V1環境)でのみ生じることができる。さらにそれが可能な環境であってもDPdefの生起は義務的ではなく、通常の代名詞も交替形として生じることができる。このように幾重にもフィルターがかかることで、初期英語の空主語生起率は全体として非常に低く抑えられていたのである。(34)と異なり、(35)の階層図は空主語の認可に関連するパラメーターの関係を捉えたものではない。パラメーター変異といえるのは、最上位のデフォルト一致に関する分岐点のみである。またここに含まれない動詞屈折接辞の衰退が、英語から空主語が消失した最終的な引き金となったことは4.3節で述べたとおりである。したがって単純な比較はできないものの、英語における空主語の消失を説明するモデルとして事実に合致しているのは、(34)のパラメーター階層ではなく(35)である。言い換えると、「通時的妥当性」の観点では(35)の見方に利があるということである。V1環境におけるDPdefの使用頻度が徐々に低くなることによって π のデフォルト一致方略が習得されなくなり、結果として空主語を許さない話者が初期英語の言語コミュニティで次第に増えていったというのは十分ありうる話である。そのように考えれば、後期中英語でV2が消失する以前の古英語で空主語がすでに衰退傾向にあったという事実に説明がつく。

6. 結語

本稿では初期英語における空主語の認可と消失を分析した。均質的空主語言語と比較して古英語から後期中英語にかけての空主語の生起は質的にも量的にも非常に限定されており、一部の話者がV1環境で三人称解釈の空主語を随意的に許したにすぎなかった。そこから、2節では初期英語を「局所的な空主語言語」として特徴づけた。また3節では、初期英語の派生メカニズムを紹介するとともに、英語における空主語の消失がV2語順の消失とほぼ一致することを指摘した。そして4節では、英語の空主語が人称素性を欠いたDPdefであり、Top^bP指定部まで移動して談話レベルの話題連鎖の一部となることで解釈されると提案した。初期英語の空主語の分布の「局所性」は、(i) π のデフォルト一致を許す話者と許さない話者がいたこと、(ii) V1環境でのみDPdefがTop^bPに移動してきたこと、(iii) 話題連鎖で三人称解釈を受けたときのみFinP内部で人称の値が矛盾しなかったことから生じた。また後期中英語で空主語が消失したのは、 ϕ とDPdefのデフォルト一致が不可能になったためである。最後に5節では、Robertsの空主語パラメーター階層と本稿の分析を比較し、後者の方が多く

の言語で空主語が失われる方向で変化するという一般的な傾向を正しく捉えられると論じた。

*本稿は日本英文学会第92回全国大会(2020年7月6日-15日、於日本英文学会公式ウェブサイト)シンポジウム「空項(発音されない項)に関する諸問題」での発表に基づいている。草稿に対して有益なコメントをいただいた島越郎氏、北田伸一氏、藏藤健雄氏、小原真子氏、小林亜希子氏に感謝申し上げる。いうまでもなく、本稿に残された一切の不備は筆者に帰するものである。また本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号17K02812)の助成を受けている。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Frascarelli, Mara (2007) "Subjects, Topics and the Interpretation of Referential *Pro*: An Interface Approach to the Linking of (Null) Pronouns," *Natural Language and Linguistic Theory* 25, 691-734.
- Frascarelli, Mara (2018) "The Interpretation of *Pro* in Consistent and Partial Null-Subject Languages: A Comparative Interface Analysis," *Null Subjects in Generative Grammar: A Synchronic and Diachronic Perspective*, ed. by Federica Cognola and Jan Casalicchio, 211-239, Oxford University Press, Oxford.
- Frascarelli, Mara and Ángel L. Jiménez-Fernández (2019) "Understanding Partiality in *Pro*-Drop Languages: An Information-Structure Approach," *Syntax* 22, 162-198.
- Gelderen, Elly van (2000) *A History of English Reflexive Pronouns: Person, Self, and Interpretability*, John Benjamins, Amsterdam.
- Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral dissertation, MIT.
- Holmberg, Anders (2005) "Is There a Little *Pro*? : Evidence from Finnish," *Linguistic Inquiry* 36, 533-564.
- Holmberg, Anders (2010) "Null Subject Parameters," *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, ed. by Theresa Biberauer, Anders Holmberg, Ian Roberts and Michelle Sheehan, 88-124, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hulk, Aafke and Ans van Kemenade (1993) "Subjects,

- Nominative Case, Agreement and Functional Heads," *Lingua* 89, 181-215.
- Hulk, Aafke and Ans van Kemenade (1995) "Verb Second, *Pro*-Drop, Functional Projections and Language Change," *Clause Structure and Language Change*, ed. by Adrian Battye and Ian Roberts, 227-256, Oxford University Press, Oxford.
- Kato, Mary A. and Francisco Ordóñez (2019) "Topic Subjects in Brazilian Portuguese and Clitic Left Dislocation in Dominican Spanish: The Role of Clitics and Null Subjects," *Syntax* 22, 229-247.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, 2nd ed. (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Nawata, Hiroyuki (2009) "Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English," *English Linguistics* 26, 247-283.
- Nawata, Hiroyuki (2014) "Verbal Inflection, Feature Inheritance, and the Loss of Null Subjects in Middle English," *Interdisciplinary Information Sciences* 20, 103-120.
- 縄田裕幸 (2019)「英語の節構造の変化」草稿, 島根大学 (『生成文法と言語変化』所収予定).
- Nunes, Jairo (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Perlmutter, David M. (1971) *Deep and Surface Constraints in Syntax*, Holt, Rinehart, & Winston, New York.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) "T-to-C Movement: Causes and Consequences," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 355-426, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2004) "Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories," *The Syntax of Time*, ed. by Jacqueline Guéron and Jacqueline Lecarme, 495-537, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pintzuk, Susan and Leendert Plug (2001) *The York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Poetry* (YCOEP), University of York, York.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *Pro*," *Linguistic Inquiry* 17, 501-557.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Roberts, Ian (2012) "Macroparameters and Minimalism: A Programme for Comparative Research," *Parameter Theory and Linguistic Change*, ed. by Charlotte Galves, Sonia Cyrino, Ruth Lopes, Filomena Sandalo and Juanito Avelar, 320-335, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian (2019) *Parameter Hierarchies and Universal Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian and Anders Holmberg (2010) Introduction: Parameters in Minimalist Theory," *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*, ed. by Theresa Biberauer, Anders Holmberg, Ian Roberts and Michelle Sheehan, 1-57, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rusten, Kristian A. (2019) *Referential Null Subjects in Early English*, Oxford University Press, Oxford.
- Sigurðsson, Halldór Ármann and Anders Holmberg (2008) "Icelandic Dative Intervention: Person and Number are Separate Probes," *Agreement Restrictions*, ed. by Roberta D'Alessandro, Susann Fischer and Gunnar Hrafn Hrafnbjargarson, 251-280, Mouton, Berlin.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.
- Walkden, George (2014) *Syntactic Reconstruction and Proto-Germanic*, Oxford University Press, Oxford.
- Walkden, George and Kristian A. Rusten (2017) "Null Subjects in Middle English," *English Language and Linguistics* 21, 439-473.